

『現代学生の意識構造』

中西 尚 道

Students' Opinion on Lectures and Campus Lives

Naomichi Nakanishi

An opinion survey on lectures and campus lives of the students of Bunkyo University was conducted in October, 1991. By analyses of the results of this survey some characteristics of students' attitude are cleared as follows.

- (1) When students entered to the university they expected firstly to study on professional lessons, and secondly to make intimate friends in the campus.
- (2) The students want to learn practical lessons rather than basic lessons. However, managers of enterprise expect students to learn basic lessons.
- (3) Not a few students have their dissatisfaction with lessons because there lack of communications between professors and students in class.
- (4) As to the images of Bunkyo University, the students of Koshigaya Campus imagine "Training school of teachers", and those of Shonan Campus imagine "A new type of college".
- (5) As to the images of the students of Bunkyo University, many students imagine "they are enjoying their campus lives".

I dare say there are three types of students : Firstly those who enjoy their campus lives with their friends. Secondly those who study hard professional lessons. And thirdly those who have dissatisfactions with lessons. Most students have, more or less, all elements of these three types.

まえがき :

平成3年度に、学園基本構想に関するプロジェクトが設けられて、学園の将来に向けて、基本的な検討が行われた。その中の一部会である「企画部会」では、大学教育のあり方を考えるための基礎資料を得るため、学生、父母、企業を対象として意識調査を実施した。その結果はすでに『学園基本構想答申書』の中で報告したが、この小論は、その調査の中から、学生を対象とする調査の結果を再分析して、現代学生の意識構造を明らかにしようとするものである。

1. 入学時の大学への期待

「文教大学へ入学した時、どのような期待を持っていたか」を尋ねた結果では（回答は2つ）、『専門の勉強ができること』75%、『友達と仲よくできること』55%をあげる者が多かった。つまり、入学時の大学への期待は、勉強と交友とが大きな柱になっている。そして、専門の勉強をしたいという「たてまえ的な」期待と、友達と仲よくしたいという「本音的な」期待とが交錯しているのが実情である。

入学の方法や授業に対する意識との関連でみると、推薦入試で入学した学生、浪人の経験がなくストレートで入学した学生、進学に際して大学生活の楽しさを重視した学生には友達と仲よくしたいという『交友』志向が比較的強い。また体育会の経験者にも『交友』志向の強い傾向がみられる。

	〈入学の方法〉		〈浪人の経験〉		〈大学の楽しさ〉	
	[学力]	[推薦]	[なし]	[あり]	[重視]	[重視せず]
専門の勉強ができること	74%	76%	76%	72%	73%	77%
友達と仲よくできること	49	63	58	49	71	46
100% =	316	228	378	164	200	349

	〈体育会経験〉		〈授業の理解度〉		
	[あり]	[なし]	[大半理解]	[少し理解]	[半分不解]
専門の勉強ができること	71%	76%	87%	73%	59%
友達と仲よくできること	63	52	45	57	63
100% =	126	344	152	313	83

	〈授業の希望〉		〈授業の満足度〉		
	[基礎的]	[実践的]	[満足]	[半々]	[不満]
専門の勉強ができること	82%	73%	85%	73%	62%
友達と仲よくできること	59	52	52	58	54
100% =	157	358	239	165	144

これに対して、授業の大半を理解している学生、授業にはほぼ満足している学生、授業内容には基礎的・基本的な内容を希望する学生には、専門の勉強をしたいという『勉強』志向が比較的強い。そして、授業の半分ぐらいが理解できない学生には『交友』志向が比較的強いが、授業の満足度や授業内容の希望の面では、『交友』志向の特徴はみられない。

調査では、入学した時の期待として尋ねた内容であるが、入学後何年も経っている学生にとっては、その後の大学生活によって変わってきた面もあると考えられるので、現在の勉強志向、交友志向としてとらえることができると思われる。このようにして考えてみると、日常の授業の理解度、満足度が学生の意識に与える影響は大きい。授業が十分に理解できないために、勉強よりも交友に走るという傾向がある程度伺われる。

それに対して、授業の大半を理解し、授業に対する満足度の比較的高い学生は、勉強志向を維持し続けているということが出来る。

2. 授業に対する意識

(1) 授業の内容について

「授業の内容は、基礎的・基本的な内容のものを多くしてほしいか、社会に出てすぐに役に立つ内容のものを多くしてほしいか」を尋ねた結果では、どちらかといえばという回答を含めて『社会に出てすぐに役に立つ内容の授業を多くしてほしい』という回答が66%と多かった。一方、企業を対象として行った調査の結果、企業の多くは、大学生に対しては基礎的・基本的な内容の勉強をすることを期待しており、この点が一つの大きなギャップである。

基礎的・基本的な内容の勉強は、とかく面白味に欠け、かなりの努力を必要とするものである。あまり努力をしないで、即戦力を身につけたいという気持を持っているのが最近の学生の特徴であるが、とかく社会に出てすぐに役に立つ内容の勉強をした方が企業が受け入れてくれると思っているようである。そして、企業や社会は、すぐに役に立つ内容よりも、基礎的・基本的な内容の勉強の方を求めていることに、学生たちは気づいていないらしい。

授業の内容に対する要望は、授業の理解度との関連はみられないが、授業の満足度との関連がみられる。つまり、今受けている授業にほぼ満足している学生には、『基礎的・基本的な内容の授業を多くしてほしい』という者が比較的多いものに対して、満足できない授業の方が多い学生には、『社会に出てすぐに役に立つ内容の授業を多くしてほしい』という者が比較的多くみられる。

〈授業の満足度〉

	[満足]	[半々]	[不満]
基礎的・基本的内容を多く	33%	28%	24%
社会に出てすぐ役立つ内容	60	67	72
100% =	239	165	144

この結果から直ちに言及することはできないが、今日の授業の問題として、基礎的・基本的な内容の授業に、学生の興味を欠いているものがかなりあることが一つの原因になっていると考えられる。一般教育科目の改定が検討されている中で、この問題を大いに考慮することが必要であると思われる。

(2) 授業の理解度について

「今受けている授業について、理解できるものが多いか、難しく理解できないものが多いか」を尋ねた結果では、『理解できる授業が多いが、理解できない授業もある』が57%で最も多かった。『大部分の授業が理解できる』が28%で、両者を合わせると、大部分の学生は今受けている授業をだいたい理解しているということが出来る。

しかし、『難しく理解できない授業が半分ぐらいある』12%、『難しく理解できない授業の方が多い』3%という者も少なくなく、情報学部の学生にはこのような学生が比較的多い。次に示すように、授業を理解できないことが、授業に対する不満の一つの要因になっていること、更に、文教大学の学生になったことを良かったとは思わないことの要因になっていることを考えると、当然のことながら、授業の理解度ということは最も根本的な問題である。

(3) 授業に対する不満について

「今受けている授業に満足しているか」を尋ねた結果では、『満足している授業が多いが、満足できない授業も少しある』36%、『満足と不満が半々ぐらい』30%の両者で3分の2を占めてい

る。しかし『どちらかといえば満足できない授業の方が多い』20%という回答も決して少なくなく、授業に対する不満はかなりあるものとみられる。特に、情報学部の学生に、満足できない授業が多いという者が多くみられる。

授業に対する不満は、授業の理解度と関連が大きい。授業の大半を理解している学生には、授業の満足度の高い者が比較的多く、理解できない授業が多い学生には、不満の多い者が比較的多い。また、ストレートで入学した学生には、満足度の高い者が比較的多いものに対して、浪人の経験のある学生には、不満のある者が比較的多い。更に、サークルの経験者には満足度の低い者が比較的多くみられる。体育会や文化会の場合には、このような傾向はみられない。今日のサークルには遊びを中心として形成されているものが多く、授業に必ずしも満足できない学生たちが比較的多く集まっている様子が伺われる。

	〈授業の理解度〉			〈浪人の経験〉		〈サークル経験〉	
	[理解]	[少し]	[不解]	[なし]	[あり]	[あり]	[なし]
満足な授業が多い	56%	45%	13%	48%	34%	40%	50%
満足と不満が半々	22	34	31	30	32	32	26
不満な授業が多い	22	21	55	23	34	28	24
100% =	152	313	83	378	164	280	202

(4) 授業に対する不満理由

授業に対する不満の理由の主なものは次のとおりである。(回答は2つ)

『一方的な講義が多い』47%、『知識を切り売りするだけの講義が多い』32%、『先生と学生との討議や対話がない』17%、『ノートがうまくとれない』15%、『周りの学生が騒がしくてよく聞こえない』12%、『難しくてよく理解できない』11%。

不満の理由には、大学あるいは教師の側の責任に帰すものもあれば、学生の側の努力不足に基づくと考えられるものもある。ただ、講義が一方的であり、対話がない点を指摘する声の大きいことに注意すべきである。

講義が一方的であり、討議や対話がないという不満の理由は、授業の理解度とはあまり関連がないが、授業方法で、『学生にあてて、質問する』のが望ましいとする者に比較的多くみられる。討議や対話がないという不満は、授業に満足している学生の中にもかなりみられる不満である。つまり、授業に対して積極的に対応している学生にこのような不満が多いことになる。体育会の経験者には、討議や対話がないことに対する不満が比較的多い。この点からも、体育会の経験者には授業に対しても積極的に対応している学生が比較的多いことが伺われる。

大教室での受講生の多い授業の場合は、討議や対話のために時間を割く余裕はなかなかないが、一方的な講義にならない工夫をすることによって、不満のある程度は解消することができるのではないかと考えられる。

『ノートがうまくとれない』、『難しくて理解できない』という不満は、当然のことながら、理解できない授業が多いという者、ならびに『学生にあてることをしない』のが望ましいとする者に比較的多くみられる。つまり、授業に対して消極的な態度をとっている学生の不満である。これらの学生に対しては、きっかけを与えて授業に興味を持たせる工夫が必要であろう。

	〈学生にあてる〉		〈授業の理解度〉		
	[する]	[しない]	[理解]	[少し]	[不解]
難しく理解できない	7%	17%	0%	9%	39%
知識の切り売り	34	30	33	32	31
一方的な講義が多い	52	32	46	48	45
討議や対話がない	22	8	16	19	8
ノートがとれない	9	25	9	14	27
100% =	328	213	152	313	83

	〈体育会の経験〉		〈授業の満足度〉		
	[あり]	[なし]	[満足]	[半々]	[不満]
難しく理解できない	9%	12%	6%	15%	14%
知識の切り売り	33	31	20	42	42
一方的な講義が多い	44	48	38	55	53
討議や対話がない	22	8	21	12	14
ノートがとれない	9	25	14	19	11
100% =	126	344	239	165	144

3. 大学教育への期待

(1) 先生への要望・期待

「先生に対する要望や期待」を2つ選んでもらった結果、比較的多くの学生があげた項目は次のとおりであった。『大学で学ぶことの喜びや楽しさを教えてほしい』44%、『授業内容の充実に徹してほしい』40%、『人間の行き方や人生の厳しさを教えてほしい』38%、『気軽に話ができるよう、もっと優しく接してほしい』31%。

先生への要望や期待は、幅広い人間的な教育と、授業を通しての具体的な教育の2面のあることを示している。

『大学で学ぶことの喜びや楽しさを教えてほしい』とする学生には、文教大学の学生になってよかったと思う総合評価の高い者に比較的多くみられる。つまり、文教大学のよさは、先生に対して単に授業だけのつき合いではなく、もっと幅広いつき合いを通じての人間的な教育を求めていることがわかる。

一方『授業内容の充実に徹してほしい』とする学生は、入学に際して『大学のイメージを重視しなかった』者、『大学生生活の楽しさを重視しなかった』者、評価の方法では『筆記試験を望む』者、『授業内容は大部分理解している』者に比較的多くみられる。いわゆるまじめに勉強するタイプの学生は、授業内容の充実に強く求めているということが出来る。一方、総合評価の悪い学生には授業内容の充実に求めている者が比較的多いが、これは裏を返せば、授業内容に何らかの不满があるため、総合評価が悪くなっていることを示すものである。

面白いことに、『もっと優しく接してほしい』とする学生は、入学に際して『大学のイメージを重視した』者、『大学生生活の楽しさを重視した』者、評価の方法では『筆記試験を望まない』者、『授業内容は理解できないものが多い』者に比較的多くみられる。しかし、女子学生に多いわけではなく(男子33%、女子29%)、一部の男子学生の甘えのようなものが感じられる。

	〈大学イメージ〉		〈大学の楽しさ〉		〈筆記試験〉	
	[重視]	[重視せず]	[重視]	[重視せず]	[望む]	[望まぬ]
学ぶことの喜び	48%	40%	49%	41%	40%	47%
授業の内容の充実	33	45	33	44	44	36
優しく接して	35	27	37	27	27	34
100% =	244	305	200	349	241	299

	〈授業の理解度〉			〈総合評価〉		
	[理解]	[少し]	[不解]	[良い]	[まあ良い]	[不満あり]
学ぶことの喜び	37%	47%	45%	54%	42%	43%
授業の内容の充実	53	37	24	29	40	45
優しく接して	24	32	37	34	32	27
100% =	152	313	83	92	253	188

(2) 学生生活への期待

「これからの学生生活で、努力したいと思うもの」を2つあげてもらった結果、多くの者があげた項目は次のとおりであった。『同じキャンパスの友人と親しくつき合う』71%、『クラブ活動を積極的に行う』35%、『授業以外で先生と接触する』24%、『他大学の学生と交流する』24%。そして、ボランティア活動や地元の人たちとの交流を期待する学生は比較的少なかった。

『同じキャンパスの友人と親しくつき合う』とする学生は、推薦入学の学生、ストレートに入学した学生、入学に際して『大学のイメージを重視した』者、『大学生活の楽しさを重視した』者に比較的多く、総合評価の高い者にも比較的多い。つまり、学生生活の中心を友人との親しいつき合いに置いているタイプの学生は、入学当初からそれをイメージしており、現在の学生生活にも満足しているといえることができる。

『クラブ活動を積極的に行う』とする学生は、入学に際して『大学のイメージを重視した』者、『学生生活の楽しさを重視した』者、総合評価の高い者に比較的多いなど、前者と同じような傾向がみられるが、更に入学に際して『就職に有利なことを重視した』者、体育会経験者に比較的多くみられる。就職に際して有利であると考えられることから、クラブ活動を積極的に行う学生がいること、特に体育会系のクラブに所属する学生は積極的にクラブ活動を行おうとしていることがわかる。

	〈入学の方法〉		〈大学イメージ〉		〈大学の楽しさ〉	
	[学力]	[推薦]	[重視]	[重視せず]	[重視]	[重視せず]
友人と親しく	68%	76%	75%	68%	77%	68%
クラブ活動	35	35	41	30	40	32
先生と接触	23	25	27	22	24	25
他大学と交流	23	25	18	29	26	23
100% =	316	228	244	305	200	349

	〈浪人の経験〉		〈就職に有利〉		〈学生にあてる〉	
	[なし]	[あり]	[重視]	[重視せず]	[する]	[しない]
友人と親しく	74%	66%	74%	70%	70%	75%
クラブ活動	36	34	41	32	33	39
先生と接触	25	23	29	27	30	15
他大学と交流	25	23	22	25	22	27
100% =	378	164	185	363	328	213

	〈体育会の経験〉		〈サークル経験〉		〈総合評価〉		
	[あり]	[なし]	[あり]	[なし]	[良い]	[まあ良]	[不満あり]
友人と親しく	75%	70%	73%	67%	79%	75%	64%
クラブ活動	47	31	32	36	54	36	23
先生と接触	21	27	22	31	18	27	23
他大学と交流	19	26	28	20	12	23	31
100% =	126	344	280	202	92	253	188

『授業以外で先生と接触する』とする学生は、上記の学生たちとは基本的に違うタイプの学生である。授業では『学生にあてて質問する』ことを望む者、サークル活動の経験のない者に比較的多くみられる。学生生活は、友人よりも先生を通じて、授業だけでなく、幅広く人間的な教養を会得しようとしている学生のいることがわかる。

『他大学の学生と交流する』とする学生は、入学に際して『大学のイメージを重視しなかった』者、総合評価の低い者に比較的多くみられる。現時点では、他大学の学生との交流を期待するのは、キャンパス内でやるべきことを十分に行った上で他大学にまで広がりを持つとういうのではなく、現状に満足できないために、他大学との交流を求めようとする気持ちの表れであるように思われる。

4. 大学ならびに大学生活に対する評価

(1) 文教大学のイメージ

『文教大学についてどのようなイメージを持っているか』を尋ねた結果、1番目と2番目に上げた項目の合計で、多い順に示すと次のとおりである。『教育者を養成する大学』59%、『世間あまり知られていない大学』54%、『平凡な普通の大学』23%、『伝統のある真面目な学生の多い大学』20%、『首都圏にある小さな大学』11%、『これからの社会を目指す斬新な大学』10%、『新しい時代の若々しい大学』7%。

しかし、文教大学についてのイメージは、越谷校舎の学生と湘南校舎の学生とでは著しい違いがある。越谷校舎と湘南校舎別の結果は次のとおりである。

	越谷校舎	湘南校舎
『教育者を養成する大学』	75%	16%
『世間あまり知られていない大学』	51	61
『平凡な普通の大学』	17	37
『伝統のある真面目な学生の多い大学』	27	1

『首都圏にある小さな大学』	9	16
『これからの社会を目指す斬新な大学』	3	29
『新しい時代の若々しい大学』	1	22
100% =	402	147

「教育者の養成」「真面目な学生」は越谷校舎のイメージであり、「斬新な大学」「若々しい大学」は湘南のイメージである。教育学部の伝統ある越谷校舎とまだ十年に満たない湘南校舎とでこのような違いが表れることは当然であろう。

「世間に知られていない」というイメージは両校舎に共通しているが、このようなイメージを持っている学生は、入学に際して『大学のイメージを重視せず』、『授業の大半を理解せず』、『授業には不満が多く』、授業では『学生にあてないことを望み』、『総合評価のよくない』者に比較的多い。つまり現状に満足せず、あまり努力をしていない学生がこのようなイメージを持っているものと考えられる。

一方、総合評価のよい学生の場合は、越谷校舎では、「教育者の養成」あるいは「真面目な学生」というイメージを持っており、湘南校舎では、「斬新な大学」あるいは「若々しい大学」というイメージを持っている。したがって、伝統のある越谷のイメージとは別に、湘南の新しいイメージが形成されることが期待できる。

	〈大学イメージ〉		〈学生にあてる〉		〈授業の理解度〉		
	[重視]	[重視せず]	[する]	[しない]	[理解]	[少し]	[不解]
教育者の養成	62%	56%	63%	52%	63%	63%	37%
真面目な学生	25	16	24	15	26	20	8
斬新な大学	14	7	10	10	7	9	18
知られてない	44	62	48	64	49	54	63
100% =	244	305	328	213	152	313	83

	〈授業の満足度〉			〈総合評価〉	
	[満足]	[半々]	[不満]	[良い]	[まあ良] [不満あり]
教育者の養成	67%	57%	49%	67%	64% 49%
真面目な学生	26	28	13	25	26 10
斬新な大学	11	13	6	15	11 6
知られてない	48	53	65	45	49 67
100% =	239	165	144	92	253 188

(2) 文教大学生のイメージ

「現在の文教大学の学生をどう思うか」を尋ねた結果は次のとおりであった。

『適当に楽しんでいる学生が多い』29%、『おっとりしている学生が多い』17%、『惰性的に大学へ来ている学生が多い』15%、『クラブ活動に熱心な学生が多い』11%、『専門の勉強に熱心な学生が多い』9%。

「適当に楽しんでいる」「惰性的」は湘南校舎の学生に比較的多く、「クラブ活動に熱心」「勉強

に熱心」は越谷校舎の学生に比較的多いが、大学のイメージの場合ほどの大きな違いはみられない。

『クラブ活動に熱心な学生が多い』あるいは『専門の勉強に熱心な学生が多い』とする学生は、総合評価の高い者に比較的多く、文教大学生のイメージには自分の姿が反映しているとみられる。『惰性的に大学へ来ている学生が多い』とする学生は、出席をとらないことを望み、授業の内容を理解せず、授業には不満があって、総合評価のよくない者に比較的多く、やはり自分の姿が反映されているとみられる。しかし、『適当に楽しんでいる学生が多い』とする学生は、授業の内容を理解していない者に比較的多いが、総合評価のよい者にも、よくない者にも同じようにみられる。したがって、この場合は、自分の姿を反映させている者ばかりでなく、客観的にみている者の結果でもありと考えられる。

	〈出席のとり方〉		〈授業の理解度〉		
	[とる]	[とらない]	[理解]	[少し]	[不解]
勉強に熱心な学生が多い	11%	7%	12%	8%	7%
クラブ活動に熱心な学生	11	10	12	13	1
適当に楽しんでいる学生	32	25	24	27	45
惰性的に大学へ来ている	12	20	14	15	19
100% =	295	250	152	313	83

	〈授業の満足度〉			〈総合評価〉		
	[満足]	[半々]	[不満]	[良い]	[まあ良]	[不満あり]
勉強に熱心な学生が多い	12%	7%	5%	11%	11%	5%
クラブ活動に熱心な学生	13	10	7	16	12	6
適当に楽しんでいる学生	24	29	37	30	26	32
惰性的に大学へ来ている	10	18	19	3	15	20
100% =	239	165	144	92	253	188

『おっとりしている学生が多い』というイメージは、特定の層に集中しているわけではなく、学生に広く浸透しているので、今日の文教大学生の一つの特徴を表しているといえる。

(3) 大学生生活の総合評価

「文教大学の学生になったことをどう思うか」を尋ねて、大学生生活の総合評価を捉えることにしたが、全体の結果は次のとおりである。

『文教大学の学生になって、本当によかったと思っている』17%、『すべての点で満足しているわけではないが、まあよかったと思っている』46%、『不満もあるが、よかったと思っているところもある』26%、『あまりよかったとは思わない』8%。

全体として、本当によかったと思う者は少ないが、まあよかったという評価をしている学生が半数以上を占めている。すでにみてきたように、授業の内容を十分に理解していない者、授業にかなりの不満を持っている者もあるが、大勢としては大学生生活の現状に満足しているといえる。

調査結果によって分析すると、入学に際して、大学のイメージを重視し、就職が有利であるこ

とを重視し、大学生生活の楽しさを重視し、第一志望で本学に入学した学生には、総合評価の高い者が比較的多い。このことは、入学の当初から目標を掲げて入学し、大学生生活を送ることが大事であることを示しているといえることができる。

一方、授業方法については、出席をとることを望み、学生にあてることを望む学生には総合評価の高い者が比較的多い。当然のことながら、授業の満足度の高い学生にも、総合評価の高い者が多い。つまり、大学の授業に対して、積極的に対応している学生は、現在の大学に満足しており、その結果として、文教大学生になったことを良かったと思っているわけである。

	〈大学イメージ〉		〈就職が有利〉		〈大学の楽しさ〉	
	[重視]	[重視せず]	[重視]	[重視せず]	[重視]	[重視せず]
本当によかった	23%	11%	25%	13%	23%	13%
まあよかった	53	41	53	42	50	44
よい面も不満も	19	32	17	31	20	30
よくなかった	3	12	4	10	4	10
100% =	244	305	185	363	200	349

	〈入学の方法〉		〈志望順位〉		〈出席のとり方〉	
	[学力]	[推薦]	[第一]	[第二以下]	[とる]	[とらない]
本当によかった	17%	17%	18%	15%	21%	12%
まあよかった	42	52	52	41	51	41
よい面も不満も	30	21	19	32	23	30
よくなかった	9	7	7	9	2	14
100% =	316	228	252	281	295	250

	〈学生にあてる〉		〈授業の満足度〉		
	[する]	[しない]	[満足]	[半々]	[不満]
本当によかった	18%	15%	25%	14%	7%
まあよかった	49	42	55	47	30
よい面も不満も	26	28	16	29	39
よくなかった	5	12	2	6	20
100% =	328	213	239	165	144

5. 現代学生の意識の特徴

以上の調査結果の分析を通じて明らかにされた現代学生の意識の特徴について考えてみると、学生を三つのタイプに分類することができる。

第一は『友人・楽しさ志向タイプ』の学生である。大学への入学の期待では、友達と仲よくできることに大きな期待を持ち、入学に際しては、大学生生活の楽しさを重視して、大学を選択し、大学生の多くは適当に楽しんでいるとみている学生である。このタイプは、浪人の経験がなく、推薦入学の学生に比較的多くみられるが、文教大学の湘南キャンパスでは、このタイプの学生が多数を占めている。このタイプの学生は、大学の授業に特に不満を持っているわけではなく、大

学生生活についての総合評価は比較的高い。

第二は『勉強志向タイプ』の学生である。大学への入学の期待では、専門の勉強ができることに大きな期待を持ち、大学の授業内容は大半を理解しており、授業に対する満足度もかなり高い。しかし、授業の中で対話や討議がないことに対する不満を持つ者はかなりいる。このタイプは、浪人の経験の有無や、学力・推薦の入学方法にはあまり関係はないが、越谷キャンパスでは、このタイプの学生が多数を占めている。このタイプの学生も、大学生生活についての総合評価は比較的高い。

第三は『不満タイプ』の学生である。このタイプの学生は、難しく理解できない授業が半分あるいはそれ以上に多い学生で、そのことが授業に対する不満を生み、学生生活全般に対する不満を生んでいる。このタイプの学生には、不満の理由として、知識の切り売りや一方的な講義に対する不満のほか、ノートがとれないという不満がかなり高い。一方このタイプの学生には、先生に対して学ぶことの喜びや楽しさを教えてほしいという期待を持っている者が少なくない。不満タイプの学生は、当然のことながら、大学生生活に対する総合評価は低い、大学生生活を完全に捨て去っているわけではないことを考えなければならない。

現代の学生の中には、これらのタイプの学生が混在しているが、それぞれの典型的なタイプの学生ばかりいるわけではない。それぞれの学生は、これらの意識を要素として持っていると言った方がよいかも知れない。一人々々の学生の意識の中に、これらのタイプの意識が入り交じっているとみることもできる。

ところで、『勉強志向タイプ』の傾向の強い学生が、何らかの問題が原因で、『不満タイプ』の傾向の強い学生に転向してしまう危険性が存在しているし、逆に『不満タイプ』の傾向の強い学生が、何か一つのきっかけをつかんで、大学生生活に喜びを見出すことも可能である。更に、『友人・楽しさ志向タイプ』の傾向を持ち、現状に満足している学生も自分のペースで大学の授業内容を把握し、大きく成長してゆくことが期待される。

この調査結果の分析によって、現代の学生の意識の特徴がいささかなりとも明らかにされたと思われる。この小論が、これからの大学の授業方法の改善、ならびに学生に対する全人格的な指導の上に役に立つことができれば幸いである。

◇調査の方法

ここで用いた調査は、文教大学5学部の学生を対象とし、学生名簿から4分の1抽出によって選んだ1,373名に対して調査したものである。調査の実施方法は、対象となった学生に対して、平成3年10月9日に調査票を郵送し、学生からは、記入した調査票を、越谷・湘南各校舎の学生課窓口へ提出させる方法をとった。10月28日に調査票の回収を締め切ったが、回収した調査票は550票、回収率は40.1%であった。[注] なお、この調査と同時に、短期大学部学生、大学ならびに短大学生の父母、専門学校生徒、大学ならびに専門学校卒業生が就職している企業を対象とする調査も実施した。

回収した調査票は、調査票の整理・点検ならびにコーディングを行ったあと、業者に委託して入力データを作成した。調査結果の集計は、湘南校舎教育システム室の協力を得て行った。

なお、この小論を書くために調査結果の再集計を行ったが、その際に協力していただいた教育システム室の竹上技師に感謝したい。

[注] 回収率が40%で、対象となった学生の半数以上から回収できなかったことは、問題点として残っている。回答しなかった学生の中には、現状に満足していない者が多く含まれる可能性があるからである。したがって、ここで分析した学生の意識にみられる大学の授業についての問題点や不満などは、いっそう厳しく受けとめることが必要であろう。